鄭樑生著

中日関係史研究論集(一)(二)(三)(四)

山根　幸夫

本書の著者鄭樑生氏は明代史、日明関係史の研究者として、わが国でも著名である。殊に『明史日本伝正補』『明代中日関係研究』はよく知られているが、今般日中関係に関する諸論文を四冊にまとめて刊行された。先ず、各冊の内容から紹介してみたい。

第一冊（一九九〇年七月）

1、方志之倭寇史料
2、善本書的明代日本貢使資料
3、嘉靖間明廷対日本貢使策彦周良的処置始末
4、明万暦間朝鮮哨報倭情始末
5、明代中琉両国封貢関係的探討
6、唐大和尚東征伝——中国仏教東伝的一幕

第二冊（一九九二年一月）

1、漢籍之東伝対日本古代政治的影響——以聖徳太子為例
2、宋元時代東伝日本的大蔵経
3、宋元時代東伝日本的医学与医書
4、元明時代東伝日本的経史子集
5、佚存日本的『全浙兵制考』
6、日本漢学者——神田喜一郎的著述生活

第三冊（一九九三年二月）

1、宋代理学之東伝及其発展
2、日本五山禅僧対宋元理学的理解及其発展——以『大学』為例
3、日本五山禅僧的中国史書研究
4、日本漢学家狩野直喜及其『中国文学史』
5、頼世和博士（E.O. Reischauer）与『円仁入唐求法記』
6、元明時代中日関係史研究之過去与未来

第四冊（一九九四年三月）

1、日本五山禅僧接受新儒学的心路歴程
2、日本五山禅僧的儒釈二教一致論
3、日本五山禅僧的「仁義」論
4、『論語』研究在日本——以林泰輔為例（一九一五年以前）
5、陳固亭先生遺著四種
6、小川環樹著『中国小説史研究』

7、吉川幸次郎全集
8、日本当代遼史学者島田正郎的学術生活

以上、本書四冊には二六篇の論文が収録されている。鄭氏の論文の大部分は文化史に関わるものである。一―6、二―1、2、3、4、5、三―1、2、3、四―1、2、3などは、殆んど中国の文献が日本へ東伝したことを扱った論文である。一―6は仏教東伝の事実を鑑真『東征伝』を通じて論じたものである。又、日本の学者の研究業績を紹介したものに、二―6の神田喜一郎、三―4の狩野直喜、四―4の林泰輔、6の小川環樹、7の吉川幸次郎、8の島田正郎の諸篇がある。三―5はライシャワー博士の『入唐求法巡礼行記』の研究を紹介したものであり、四の5は、陳固亭の日本研究に関する成果『日本論叢』、『中日韓百年大事記』、『明治時代中日文化的連繋』、『日本新聞史』の四書を紹介したものである。

本稿では主として日明関係の諸篇を紹介することにしたい。一―1「方志之倭寇史料」では、倭寇に関しては『籌海図編』、『日本一鑑』、『倭変事略』をはじめ、多数の関係史料があり、『明実録』『明史』のような記録もあるが、これらだけでは倭寇の真相を解明することはできないとして、史料としての方志の重要性を指摘する。著者は「海防関係史料」、「戦争関係史料」、「人物関係史料」の三節にわたって、実録、明史のような官側史料と並べて方志史料を紹介し、方志史料の有効性を明らかにしようとしている。「倭寇史料所属之巻第」では、倭寇関係の史料が方志の如何なる志、如何なる項に掲載されているかを列挙している。建置志、官師志、人物志、兵備志、賦役志、雑志、芸文志など四〇余志を挙げている。各志の項目は種々雑多である。最後に、倭寇に関する史料を有する方志八四種のリストを列挙している。

一―2「善本書的明代日本貢使資料」は、先ず日本の朝貢使節の人選について説明した後、日本文献の朝貢使節に関する資料として、『蔭涼軒日録』、『大乗院寺社雑事記』『吉田家日次記』『善隣国宝記』をはじめ、貢使の書き残した『戊子入明記』、『咲雲入唐記』、『大明譜』、『策彦入明記』などの旅行記をも挙げている。次に、中国文献の中で日本貢使が来華して活動した情形を記録したものとして、第一に『明実録』を挙げている。続いて『籌海図編』、『日本一鑑』、『吾学編』、『殊域周咨録』などを挙げているが、具体的な事例として、嘉靖二年四月、寧波に入港した大内氏の使節宗設謙道と、細川氏の使節鸞岡瑞佐、宋素卿とが衝突した所謂「寧波事件」に関する資料を紹介する。即ち、『籌海図編』、『日本一鑑』、『殊域周咨録』の関連資料

を提示すると同時に、『皇明疏鈔』あるいは『桂洲奏議』『南宮奏議』などをも並べている。而して此等の善本書資料が、明代の日本貢使の中国における活動状況を示すために、如何に重要なものであったかを論じている。

一―3「嘉靖年間明廷対日本貢使策彦周良的処置始末」では、著者は先ず「寧波事件」の始末を要約した後、策彦周良の入明と、それに対する中国当局の措置を論じている。策彦の入明については、周知の如く牧田諦亮『策彦入明記の研究』（法蔵館、一九五五、五九）がある。策彦は大内義隆の請に応じて、第一回目は嘉靖一八年、副使として入明し、二回目は嘉靖二五年、正使として入明したが、寧波事件から一七年しかたっていなかった為、明廷は寧波事件に懲りて、日本の貢使に対し頗る警戒を示した。それは再び意外な事件が発生することを恐れたからであった。然し、浙江巡撫朱紈は日本貢使には適宜の処置をとり、威徳を宣慰した、と著者は述べる。朱紈は決して日本貢使を厳しく阻止する態度をとらなかったという。要約すれば、明廷は寧波事件以後、日本に対して朝貢時期を厳守することを要求したが、但し人員・船隻の制限には権宜の措置をとり、その額数をオーバーしていることは深く追究しなかったと云う。尚、策彦の帰国後三年たって、大内義隆が自殺したため、日本は再び遣明船を送ることはできなくなった。

一―4「明万暦年間朝鮮哨報倭情始末」では、豊臣秀吉が朝鮮に途を仮りて入明せんとした交渉の経緯、および朝鮮がこの情報を明朝に報告した経過を述べている。これによって当時の朝鮮政府は、日本と通信・往来している事実を掩飾するため、その事情が発生した当初、中央の執権者たちは、明に遣使して倭情を報告すべきか否かについてはげしい論争があり、報告することを決定した後も、そのために専使を派遣せず、賀節使に付随的に報告させた。報告の内容も事実をぼかして、明朝の感情を刺激することを恐れた。賀節使が中国へ赴いて、明廷の態度を諒解して以後は、専使を派して比較的詳細に報告したが、その真相は説明しなかったと云う。第三次の遣使になって、日本入寇の消息を一部始終報告したが、時日を遷延して、明側は軍機を誤り、適当な措置を講ずることができなかった、と著者は指摘している。朝鮮侵略をめぐる日・朝・明三国の関係をめぐる裏面史を解明した興味深い論稿である。

一―5「明代中琉両国封貢関係的探討」は、明代における中・琉両国の封貢関係の建立、中・琉両国の使節の往来、明廷が琉球に与えた賞賜、更には貢使が惹起した紛争について述べている。尚、琉球の明朝に対する態度が忠実懇誠であったため、来貢の際にも勘合を求めず、彼らが附搭し

た商品の収購価格も他国に比べて高かったことを指摘している。

二―4「元明時代東伝日本的経史子集」は、元明時代に中国に留学した日本僧侶が、帰国に際して携回した漢籍に対して考察を加えたものである。これらの東伝漢籍に対して、著者は詳細な考察を加えている。

二―5「佚存日本的『全浙兵制考』」は、著者が「明代倭寇史料」をまとめるため、来日して史料を捜集中、内閣文庫で偶々見出した『全浙兵制考』について、詳細な解説を加えたものである。『内閣文庫漢籍分類目録』では史部・軍政の部に、「全浙兵制考三巻、日本風土記五巻、明侯継高、明刊」と記されている。尚、別に本書の林鶚峯による手抄本（延宝五年写）も内閣文庫に存在する。著者は本書によって明代両浙地区の兵員および各種軍器の編配状況を知ることができ、同時に他省の海防の梗概を推知することもできる。而も本書はその叙述がきわめて具体的で、明代兵制史料として貴重なものである、と指摘している。

三―6「元明時代中日関係史研究之過去与未来」では、著者の従来の元明時代の中日関係史研究の成果を、中国人および日本人に分けて紹介すると共に、今後の研究の進むべき方向を指示している。著者が日明関係史研究の重要論著として挙げている図書を、以下に列挙することにしたい。まず中国人の論著から挙げる。

黎光明『嘉靖禦倭主客軍考』（燕京学報専号四、一九三三）

陳懋恒『明代倭寇考略』（燕京学報専号六、一九三三）

張維華『明代海外貿易簡論』（上海人民出版社、一九五六）

陳文石『明洪武嘉靖間的海禁政策』（台湾大学文学院、一九六六）

鄭樑生『明史日本伝正補』（文史哲出版社、一九八一）

戴裔煊『明代嘉隆年間的倭寇海盗与中国資本主義的萌芽』（中国社会科学出版社、一九八二）

鄭樑生『元明時代東伝日本的文献』（文史哲出版社、一九八四）

汪向栄『中日関係史文献論考』（中華書局、一九八五）…後半四篇

鄭樑生『明代中日関係研究』（文史哲出版社、一九八五）

鄭樑生『元明時代東伝日本的水墨画』（文史哲出版社、一九八六）

林仁川『明末清初私人海上貿易』（華東師範大学出版社、一九八七）

汪向栄『明史日本伝箋証』（巴蜀書社、一九八八）

日本人の論著としては、三浦周行、柏原昌三らの論文、小葉田淳『中世日支通交貿易史の研究』、木宮泰彦『日支交通史』、辻善之助『海外交通史話』、秋山謙蔵『日支交渉史研究』、竹越与三郎『倭寇記』、石原道博『明末清初日本乞師の研究』などの戦前の研究があるが、戦後のものとしては、次の論著が挙げられている。

牧田諦亮『策彦入明記の研究』（前掲）
田中健夫『中世海外交渉史の研究』（東大出版会、一九五九）
田中健夫『倭寇と勘合貿易』（至文堂、一九六一）
田中健夫『中世対外関係史』（東大出版会、一九七五）
田中健夫『対外関係と文化交渉』（雄山閣、一九八二）
田中健夫『倭寇』（教育社、一九八二）
佐久間重男『日明関係史の研究』（吉川弘文館、一九九二）

右の如く、戦後の日明関係の研究は、中国側の方が活発であることがわかる。殊に、本書の著者鄭樑生氏の業績は十分評価されるべきであろう。今後の日明関係史の在り方について、著者は次のように提言している。一般に利用される文献の他に、多数の資料が現在台湾公蔵の善本書中に存在する。これらの善本資料は利用する人が少ないだけでなく、従来公開、引用されていないものもある。これらの未だ利用されていない資料によって、従来の研究成果に対して、修訂を加えなければならぬ場合も生ずるし、ある問題に対して評価を改めねばならぬこともある。故に、今後日明関係史を研究する場合には、現在台湾にある一切の方志・善本を遍査すれば、事実の真相をはっきり解明できるであろう。日本に佚存する関係史料、例えば朱紈の『甓余雑集』、侯継高の『全浙兵制考』（前述）、鄭大郁の『経国雄略』、許重熙の『嘉靖以来注略』をはじめ、多数の明人文集、明清刊行の東南沿海の各州県の方志などは、漢学研究中心（国立中央図書館付属）に影印、架蔵されているから、今後の研究に大いに役立てるべきであろう、と著者は述べている。著者は台湾の場合について述べているわけであるが、わが国においても同様に、未だ研究者によって見落されている多くの文献があることは事実である。我々日本の研究者も、海外にある文献にのみ目を奪われることなく、日本の図書館に架蔵されている貴重な文献をももっと重視しなければならぬ。

なお、著者には以上の他に、宋元時代に日本へ伝わった中国文化、特に仏教と理学（宋学）の影響、五山禅僧たちの役割を論じた九篇の論文があり、本論文集の中でも重要な位置を占めている。以下、これらの論文について簡単な紹介を試みたい。まず、二―2「宋元時代東伝日本的大蔵

経」では、中国で開版された大蔵経の諸版本を紹介し、それらの蔵経が日本でどこに収蔵されているかを明らかにしている。二―3、4は、前者は宋元時代に日本へ伝わった医学および医書が、当時の日本の医学界に重大な貢献をしたことを指摘する。後者は上述した通りであるが、著者が禅宗の東伝に付随して宋代の理学も東伝し、日本の学術界、思想界に甚大な影響を与えたという指摘は傾聴すべきであろう。

三―1、2、3、四―1、2、3は、著者の上述の指摘を実証したものである。三―1は宋代の理学が五山禅僧を介して日本へ伝わり、日本思想界の主流思潮となったことを概観している。三―2は、五山禅僧がどのようにして宋元理学を理解し、それを発展させていったかを、『大学』を例として論じている。禅僧たちが「儒仏不二」「三教一致」を倡言し、理学の日本への伝播が順調に展開したとする指摘は注目に価する。三―3は、五山禅僧が自身の属する法系、伝統を正視する必要があって、仏教史を顧みざるを得ず、そのため僧史、僧伝、或いは宗派図を探究することとなり、その結果中国史の研究を重視するようになった。その成果の一つとして生れたのが虎関師錬の『元亨釈書』である、としている。

四―1は、日本の禅林が宋代理学を摂受した心路歴程を考察したもので、具体的に明極楚俊、清拙正澄、竺仙梵僊らの渡来僧が儒教を排斥しなかっただけでなく、儒・仏両家の言に相符合する処があることを認めたことを解明し、日本禅林の理学観の形成過程を論じている。更に、釈・儒二教の一致論が日本禅林でどのようにして出来あがったかを論証している。

四―2は、四―1の結論に基づいて、更に考察を深め、儒・釈二教の一致論が如何にして日本で展開したかを述べると共に、修身、中庸、心性、仁などの観念に対する見方を通じて、二教一致論の内容を観察している。四―3は、五山禅僧の「仁義」論を探究したものである。

以上に紹介したように、本論文集の中核をなすものは、前半で述べた日明関係の諸論文と、後半で述べた中国文化の日本伝来、殊に五山禅僧の理学受容を論じた諸篇である。全体的に見れば、文化史的な考察が大半を占めている。著者は国立台湾師範大学を卒業した後、日本へ留学し、東北大学の大学院に学び、筑波大学で文学博士の学位を獲得している。日本語にはすこぶる習熟しており、日本の文献史料には非常に詳しい。日本留学中は日本史学科に所属しておられたためであろう。本論文集には、そのような著者の学殖がみちあふれている。日中関係史を研究する外国人学者の中で、鄭氏ほど日本の文献資料に詳しい人は

その例をみない。その上、台北の国立中央図書館に長らく在勤していたため、中国の文献資料にも精通している。著者のこのような日、中双方の文献史料の巧みな使用によって、本論文集に収められた諸篇は、精彩を放っている。

尚、著者には、上述の『明史日本伝正補』『明代中日関係研究』の他にも、『元明時代東伝日本的文献』（文史哲出版社、一九八四）、『日本的国号』（名人出版社、一九七八）、『元明時代東伝日本的水墨画』（文史哲出版社、一九八七）、『日本通史』（明文書局、一九九三）などの諸著もある。これらの著書によってもわかるように、著者のもっとも得意とする所は、日中文化関係史であり、殊に宋、元、明の間における、日中文化関係史である。より正確に言えば、この間に中国文化がどのように日本へ東伝したかという問題である。筆者はぜひ鄭樑生氏に、宋代以降に中国文化がどのように日本へ伝来し、日本文化にどのような影響を与えたかについて、通史を執筆していただきたいと思う。勿論、それらについて多数の論文が発表されているが、個々の論文ではなく、全体を見通した、体系的な日中文化関係史を書いていただきたいと強く希望するものである。

最後に注文しておきたいことは、各論文について、その所掲雑誌名および発行年を記入しておくことを希望したい。各論文の発表年がいつであるかは、我々にとっても非常に重要なことだからである。

㈠（一九九〇年七月、文史哲出版社、A五判、一七四頁）、㈡（一九九二年一月、同上、A五判、一八〇頁）、㈢（一九九三年二月、同上、A五判、一九七頁）、㈣（一九九四年三月、同上、A五判、二一〇頁）